

第5回(平成28年度)三島海雲学術賞受賞者と選考理由

【人文科学部門】 1名(敬称略)

★杉山 清彦 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 准教授 博士(文学)

受賞テーマ 『大清帝国の形成と八旗制』

授賞理由

本書は、17世紀に成立したマンジュ(満洲)人王朝である大清帝国の形成・発展過程とその支配構造を、八旗制を中心として検討し、同時にユーラシア全体にわたる時代状況のなかでその大清帝国の位置づけを論じたもので、緻密な実証とスケールの大きな議論とを結合させた力作である。

第Ⅰ部「清初八旗の形成と構造」所収の諸章は、入関(1644年の北京進入)前の八旗制・侍衛制を主な対象として、具体的な人物の動きから清初の政権構造を実証的に検討したものであり、単なる制度史を超えた動的な考察を特色としている。個々の人物の系譜関係と統属関係の細密な分析が叙述の中心であるが、その分析を通じて導かれる結論は明快であり、八旗制度のもつ「連合政権」的な性格と皇帝権力への求心性という一見矛盾する両側面が整合的に鮮やかに説明されている。

つづいて、第Ⅱ部「近世世界のなかの大清帝国」と補論「近世ユーラシアのなかの大清帝国」において、受賞者は他分野(日本史、「中国」史、南アジア史、西アジア史など)の近年の研究を積極的にとりあげつつ、「大清帝国」の中央ユーラシア的性格という通時的な論点を「近世」という共時的な視角のもとで動的に展開している。

本書は、日本の清朝史研究が蓄積してきた豊富な実証的成果を踏まえ、それをさらに深化させるとともに、その論点をグローバルな視野のもとに引き出した点で特筆すべき成果といえる。清朝政権の性格は、従来の一国史的な枠組を超えた問題関心のもと、日本国内はもとより国際学界でも近年改めて注目を集めており、本書に結実した受賞者の一連の研究は、そうした学界状況と積極的に関わる中で生まれてきたインパクトの大きな業績である。先行研究の丁寧な整理、満文・漢文を始めとする多言語史料の精密な読解など、手堅い学問的な手続きを踏まえるとともに、概念図を用いて他分野の研究者や一般読者にもわかりやすい記述を図るといった開かれた姿勢も、本書の優れた特色といえることができる。

以上のように、受賞者の研究は独創性に富み、アジア地域を中心とする人文科学研究の発展に大きく貢献するものとして高く評価できる。